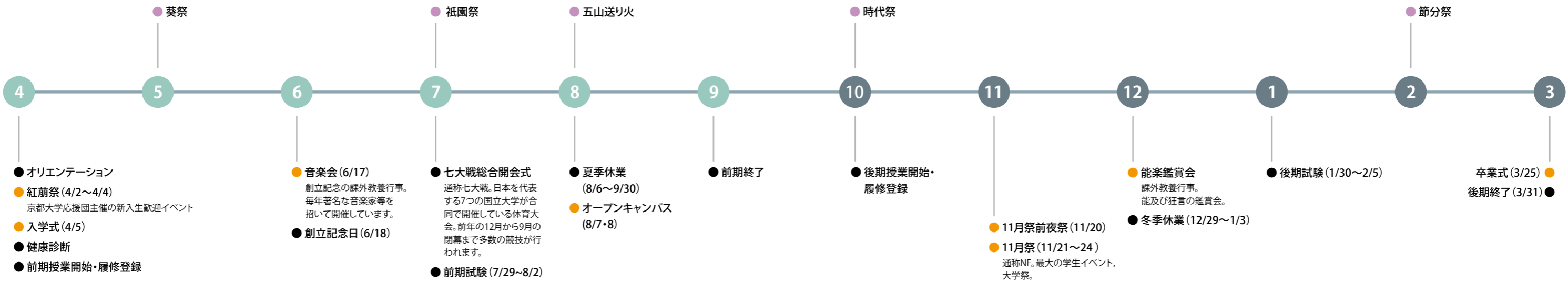


重層文化都市「京都」で過ごす京都大学の一年。

平安建都以来 1200 年の歴史を奏でる古都—京都の中に息づく京都大学は、三方を山に囲まれた京都盆地のうえに主要な3キャンパスが所在しています。
 京都に残る自然や数多くの文化財は、そこに集まる人々の内的な対話と探求を支え、新しい文化を育んできました。京都大学は地域との連携のもとにその文化を世界に発信しています。
 ここでは、美しい四季の変化、古都の文化・伝統とともに過ごす京都大学の一年を紹介します。



自らの将来を見据え、 自分の学ぶ道を作り上げていくために。

柔軟な教育システム

京都大学の教育は、学部や研究科によって様々な形をとっています。入学者は、10の学部のうちいずれかの学部(学科)に属することになりますが、学部卒業までにどのような教育を体験するかは、各学部の理念と教育方針にもとづいた教育課程によって異なります。あるいは同じ学部に属していても、卒業後にどのような進路を希望するかによって、教育課程は異なってくることもあるでしょう。

教育課程のことを「カリキュラム」といいますが、これはもともと個人が歩んだ道程を指す言葉です。そこには、与えられた課程を受動的に辿っていくのではなく、自分で自らの将来を見据えながら、自分の学ぶ道を作り上げていくという含意があります。京都大学は、学生が主体的・能動的に学ぼうと思えば、それに対して十分な学習を提供できるような柔軟な教育システムを備えています。ここでは、学部教育から大学院教育までを辿りながら、みなさんに京都大学が提供する教育の特徴を概観しておきましょう。

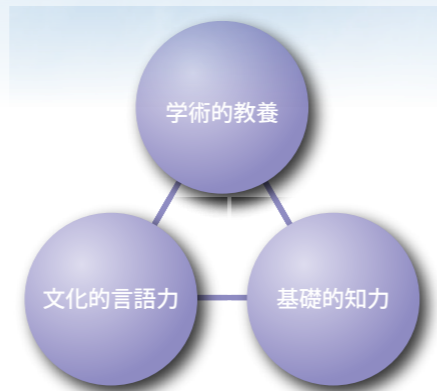
全学共通教育

どの学部に入学者の場合も、まずは全学共通科目を受講しなくてはなりません。全学共通科目とはその名前のとおり、京都大学の全学部の学生が共通して受講する科目群をさします。この科目群は、一言でいえば教養教育をおこなう

ためのものです。教養教育は、専門の勉強を始める前に、あるいは専門の勉強と並行しつつ、専門以外の分野も含め文理を問わず広く学ぶという形をとりますが、それは単に該博な知識を得るためではありません。京都大学で考える教養教育の目的は、大きく三つに分けられます。

第一には、これまで人類が築き上げ、そして現在も築きつつある学問・研究の諸分野に広く向き合い、その方法論や世界観、探求の姿勢といったものを学ぶことです。これは学問という領域をはるかに超え、人生観や世界観にまで及ぶでしょう。学問に対峙することを通して、人間的な成長や成熟も期待されていると言ってもよいでしょう。第二には、自分の言葉(言語)で批判的かつ論理的に思考を組み立て、それを他者へ伝え表現していくことを学ぶことです。この場合の言語とは、高度な日本語運用能力はもちろんのこと、あらゆる分野において世界的に活躍するために不可欠な、外国語の習得を含みます。このような批判的思考と言語運用能力を鍛えるためには、他者や異文化を正しく理解しようと努め、また協調関係を築きあげようとするのが重要です。教養教育の第三の目的は、専門教育の課程で必要とされる基礎的な学力や知識・技能を習得することです。これは、将来、みなさんが社会や学術研究をリードしていくための基盤となる知識を得るだけでなく、見通しのつかない新たな複雑な状況において、適切に課題を分析し解決法を見つけようとする姿勢も含まれます。

以上のような教養教育の3つの目的、すなわ



ち教養教育を通して獲得される能力と素養を、京都大学では順に、学術的教養、文化的言語力、基礎的知力と名付けています。京都大学の全学共通科目は、この3つの知を実現するために提供されているものです。

ただし、全学共通教育を履修すればこれら3つが自動的に獲得できるというものではありません。京都大学の提供する全学共通科目は、多様な構成となっています。専門教育といってもよいほどの高度な専門性をもっている科目もあれば、基礎的な事項の習得や他分野との関連に重きをおいた科目もあります。大学によっては、教養教育に期待される能力の習得をプログラム化して、入学者に一律に履修を課しているところもあります。しかし、京都大学はそのような立場をとりません。京都大学の学生には、入学当初から専門志向の強い傾向が見受けられます。すなわち、自分はどのような専門領域に進みたいか、という志を持つ学生が多いのです。したがって京都大学では、教えるべき専門的な内容を薄め技法の習得にのみ特化したような科目を提供するのではなく、最先端の知の生まれてくる現場に触れてもらい、研究者の背中を見て学んでいくことを学生に期待しています。このような教育構成の場合、学生の主体的で能動的な関わりが何よりも重要

となります。与えられることを待つのではなく、自分から求め学問の現場に参与していく態度を身につけることが要求されます。すなわち「生徒」から「学生」へと転換することが、必要なのです。

学部での専門教育

全学共通科目を履修しつつ、あるいは各学部が定める前期課程の履修を修了後、学部の専門教育に入ります。学部によっては、1年次からすでに、相当な専門教育を受けるところもあります。学部の教育課程を修めたと思えるための学習内容は、各学部の理念と教育方針に基づいて決定されています。

専門教育の課程に入ったからといって、教養教育と無縁になるわけではありません。京都大学の全学共通科目は、専門を勉強し始めてからも必要とあれば、いつでも履修できる構成になっています。すなわち、自分の専門の枠を広げ、自分たちの学問的範疇や方法論に関して省察し、さらに創造的にそれを広げていくことができるよう、他の学問分野との対話の可能性を開いています。この意味で京都大学の教養教育は「高度一般教育」とも呼ばれています。また、専門教育に入ってから、他学部の専門科目も履修できる場合が多いことも、京都大学の恵まれた条件としてここに付記しておきます。

学部によって異なりますが、専門教育では、研究室やゼミに属したり、学科や系と呼ばれる学部よりさらに専門分化した集団に所属すること

になります。学部の専門教育は、少人数教育の特徴を備え持つことも多く、教員との関係もさらに密なものとなるでしょう。また、講義で知識を習得するだけでなく、実習や演習といった、専門分野に特に必要とされる技能を習得するための学習形態も増えてきます。いずれの学部であれ、卒業前には、各学部での学びの総決算とでもいうべきハードルがあります。卒業研究をおこなったり卒業論文を作成したりするほか、国家試験の受験が重要な学部もあります。みなさんの希望する学部がどのような教育課程となっているかは、本誌の各学部のページを参照してください。

大学院の教育

学部卒業後には、就職する場合もあれば、さらに上位学位(修士号、博士号)の取得をめざして大学院に進学する場合もあります。京都大学では卒業生のうち約60%が大学院に進学します。いずれにしても、学部在籍中から、どのような方向に進むかということ、考えて準備しておく必要があります。

ここでは、大学院の課程に関して紹介しましょう。まず修士課程では、学部の専門課程よりも、さらに専門的な学習をすることになります。修士課程には、大きく分けて、研究者養成のための従来型の大学院の課程と、高度な職業的技能をもつ実務家養成のための専門職大学院の課程があります。修士課程では、専門家としての第一歩を踏み出すことになります。また、大学

院によっては、いったん社会に出た後に再び大学で勉強したい人のために、在職社会人を対象としたコースを設けているところもあります。

大学院には、他大学や他学部の卒業生、勤務経験のある社会人も入学してくるので、学部時代よりも学生の年齢層やキャリアが多様となるでしょう。また、分野によっては留学生の数も多くなります。このような多彩な人々の中で、みなさんの人間関係はさらに豊かなものとなるでしょう。また、大学院では、自分でテーマを発見し学んでいくことが重要となります。すなわち、良い答えを見つけることばかりでなく、良い問いを発することも重要です。修士課程修了時には、研究者養成の課程では修士論文の作成が、専門職大学院では関連専門職の資格試験の受験という、ハードルがあります。

修士課程を修了した後、研究型大学である京都大学では博士課程にまで進学する学生が多いのが特徴です。そこでは、研究テーマを自ら開拓し研究計画を立て、それにもとづき教員からの指導をうけます。博士課程在籍時には、学会での発表や学術雑誌への論文の投稿なども行うことになり、研究者としての活躍が始まるでしょう。また、様々な研究奨励資金に応募しそれが受給される機会もあります。このような研究の成果にもとづいて、博士論文を執筆し審査に合格すると、国際的に通用度の高い学位である博士号を取得することができます。なお、2012年度からは5年一貫の博士課程教育リーディングプログラムを開始しました。



「自由の学風」を尊重しつつ、真に学生の力を発揮できる 教養・共通教育を提供するために。

教養・共通教育の実施体制と特徴

京都大学では、2013年4月に設置した国際高等教育院という組織が教養・共通教育を実施するとともに、教養・共通教育全体の企画及び運営を総括しています。実施にあたっては、各学部の行う学部教育と併せて、個々の学問領域を超えた幅広い分野に共通する基礎的な知識及び方法を教授するとともに、学生が高度な学術文化に触れることを通じて豊かな人間性を育むことを目的とし、教育課程を編成しています。

この教養・共通教育は、主として全学共通科目によって担われています。全学共通科目は、各学部の枠を越えて、原則として全学部の学生を対象として、以下の5つの群に分かれて開講しています。

人文・社会科学系科目群

人文・社会科学系科目群は、以下の6つの系列に区分され、バラエティーに富んだ内容で開講されています。

- ・哲学・思想系
- ・歴史・文明系：日本、東洋、西洋、文明の4分野
- ・芸術・言語文化系：芸術、文学、言語の3分野
- ・行動科学系：教育、心理、社会の3分野
- ・地域・文化系：人類、地理、環境構成の3分野
- ・社会科学系：法律、政治、経済の3分野

また、それぞれの系列は、以下の3つに分けられています。

- ・基礎論：基礎的な知識・概念等を講義するもの

- ・各論：基礎にさらに高度な内容に触れるもの等の講義科目

- ・ゼミ等：講義と関連させて論考・研究の実際に触れる少人数の基礎ゼミナール、講読、演習等

自然・応用科学系科目群

自然・応用科学系科目群には、数学、物理学、化学、生物学、地学、情報等を主な内容とした科目や、これらにまたがる応用的な科目が多様に開講されています。

これらの中では、主に専門教育の一般的基礎となる科目や、全学生に共通の教養的な内容の科目があります。

外国語科目群

全学共通科目として開講している外国語科目には、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、イタリア語、スペイン語、朝鮮語、アラビア語、日本語(外国人留学生用)の10言語があります。外国語教育においては、学術的素養の涵養と学術的言語技能の修得を目指すとともに、異文化理解と外国語運用力の養成にも努めています。また、英語・ドイツ語・フランス語・中国語・スペイン語ではコンピュータを用いて自律的に学習できるよう、CALLというシステムを導入している授業もあります。今後、CALLを活用した授業がさらに充実するよう取り組んでいます。

現代社会適応科目群

現代社会適応科目群では、現代の社会生活と直接関連する学術・技能に関する科目が開講されています。情報系科目、健康科学系科目、環境系科目、法・倫理コンプライアンス系科目の4つの系列に分かれています。

拡大科目群

拡大科目群には、上記の4群にとらわれず、内容・水準共にバラエティーに富んだ科目が集まっています。スポーツ実習科目、少人数教育科目(ポケット・ゼミ)、カルチャー一般科目、キャリア支援科目、国際交流科目、単位互換等科目(大学コンソーシアム京都単位互換科目を含む)の6つに区分されています。

特色ある全学共通科目：少人数教育科目(ポケット・ゼミ)を拡大科目群で開講

これは、新入生を対象に、各学部・研究科・研究所・センター等の教員がフェイス・トゥ・フェイスの親密な人間関係の中で、様々な形態の授業を行うものです。異なる専門分野の教員と接することにより視野を広げ、人間・社会・自然について深く考える力を養う機会になります。

授業は、歴史、地理、古典の講読や環境・資源・宇宙・医学等の最先端の研究結果の紹介、野外実習など総合大学ならではの豊富なメニューです。

全学共通科目

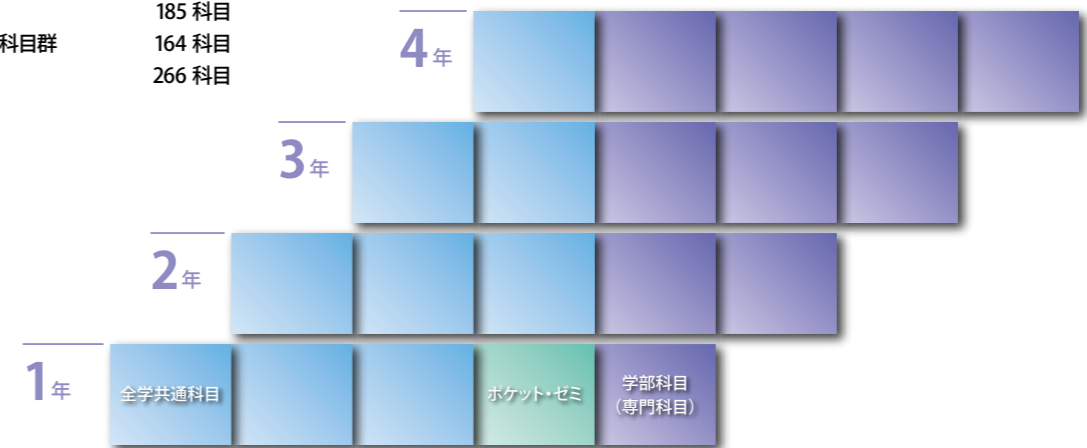
平成25年度は、全学共通科目として1,185科目を開講しています。内訳は次のとおりです。

人文・社会科学系科目群	328科目
自然・応用科学系科目群	242科目
外国語科目群	185科目
現代社会適応科目群	164科目
拡大科目群	266科目

学部科目(専門科目)

学部科目(専門科目)は、各学部の教育方針に基づき、1年次から学部の専門科目を配当しています。なお、他学部の専門科目も受講することができます。

※学部の専門科目については、学部紹介のページをご覧ください。

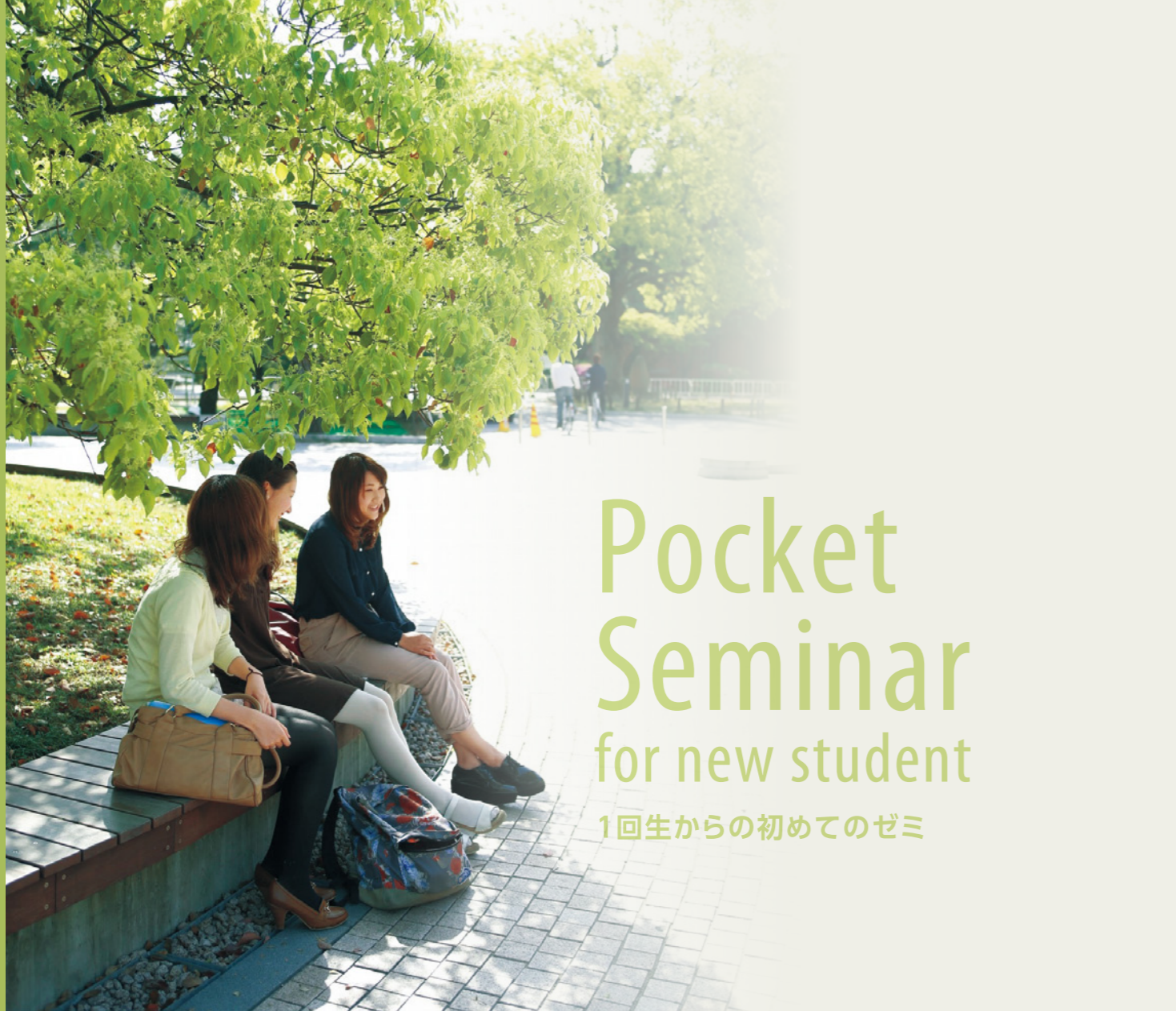


各学部の特色あるポケット・ゼミの内容を、14ページから20ページに紹介しています。また、以下のHPにも、一部の科目ですが、内容を掲載しています。

京都大学国際高等教育院 ポケット・ゼミの紹介
<http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/pocket.cgi>

[全学共通科目について詳しく知るには]
 京都大学国際高等教育院
<http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/>





Pocket Seminar for new student

1回生からの初めてのゼミ

ポケット・ゼミ Pocket Seminar

京都大学ならではの「少人数教育」,
教育の原点である人間と人間の触れあいの機会。

京都大学では、特色ある教育を目指して、平成10年度より少人数教育科目(ポケット・ゼミ)という授業科目を開設しています。

ポケット・ゼミは、新入生の希望者を対象に、全学の教員が実施する授業で、原則として10人程度の少人数単位で実施され、大学とはどういうところか、学問をするとはどういうことか、最先端の分野でどんなことが行われているかなどについて、教員が直接に学生に語りかけ、あるいはさまざまな研究のフィールドに誘う、いわば「京都大学そのものへの入門」の授業として機能しています。最近では180余りの科目が提供され、1,500人近くの学生(全入生の約50%)が受講しています。

ポケット・ゼミは本学が全国に先がけて取り組みを進めてきた少人数教育の授業法であり、これまで教員、学生の双方から高い評価を得ており、京都大学の将来にとっても重要なものと考えられています。

この章では、ポケット・ゼミの内容の一部を紹介しています。

研究所・センター



生命科学研究の第一線に立つ

ウイルス研究所
大野 睦人 教授 専門分野：分子生物学
他ウイルス研究所教員 13名

ウイルス感染症の脅威

エイズ、エボラ出血熱、新型インフルエンザなどウイルスによって引き起こされる感染症は、今も現代社会を脅かし続けています。高度に進歩した医学をもってしても、なぜウイルスを克服することができないのでしょうか?ウイルスは単独では増えることができません、私たちの細胞のな

かに入り込み、細胞が持つさまざまな仕組みを乗っ取り増えていきます。一方、私たちもやられっぱなしではなく、ウイルスに対するさまざまな対抗手段を準備してきました。このように、ウイルスと私たちはお互いに相手の裏をかくように進化を重ねてきました。この攻防はこれからも無限に続くと思われる。

ウイルス研究とは?

ウイルス研究所は「ウイルスの探究並びにウイルス病の予防及び治療に関する学理及びその応用の研究」を目的として1956年に設立されました。ウイルスを研究していくと、ウイルスの研究以外にも、ウイルスに対抗する免疫系の研究や、細胞の基本的な機能に不可欠な仕組みを研究することになります。これまでに、がん遺伝子、p53、さまざまな転写因子など、ウイルス研究から生み出された成果はたくさんあります。ウイルス研究所ではウイルス研究と生命科学研究を2つの柱として研究を続けており、成人T細胞白血病の原因ウイルスの発見や、黎明期からの日本の分子生物学をリードし、現在に至るまでさまざまな分野で成果をあげています。

ポケットゼミの内容

このポケットゼミでは、ウイルス研究所の教員がそれぞれの専門分野に関するトピックスや研究所で実際におこなわれている研究を紹介していきます。ウイルス学、免疫学、生命科学など幅広い分野で世界をリードする14名の研究者が、自らの体験やエピソードを交えて研究内容を解説したり研究現場を見せたりすることで、新しい知を獲得していく過程を共有していただきたいと思います。

研究所・センター



Academic Hip-Hop: Introduction to Psychology

高等教育研究開発推進センター
David Jerome ("DJ") Dalsky 准教授
専門分野：Psychology, English Education

This seminar brings together a blend of music, cross-cultural communication, academic content, and digital technology for a fresh and stimulating learning experience in English. The goal is to explore and introduce basic psychological concepts with hip-hop beats made especially for the seminar by the famous musician and former Kyoto University student, Mr. Toshinori Kondo. Students of the seminar are expected to create a psychology-based academic hip-hop song and produce a music video; experienced academic rappers may be invited to help with this process. The resulting music video is shared via the YouTube channel of Kyoto University OpenCourseWare—this is KU hip-hop!

総合人間学部



イギリス詩入門

高等教育研究開発推進センター（人間・環境学研究科）

桂山 康司 准教授 専門分野：英文学、英詩研究、英語教育

舌の快楽

文字に慣れ親しんだ現代人は、言葉というものを、舌を通じてではなく、目を通してのみ理解するという便法に違和感を覚えなくなり、今や、文字は電子信号に変換されて世界を高速で駆け巡る時代となった。しかし、それでもなお、舌の快楽に訴えかけるパフォーマンスが、現代においても頑に存在する一語、詩吟、音頭取り、応援団の掛け声、アカペラ。頭の理解だけでは覚束ないところがあって、声に出さなければ伝わらない何かがある。それをリズムと呼ぼうと何と呼ぼうと、ともかくも、それを限なく詩という言語芸術に総合し、結晶化させることに生涯をかけた人々がいた。このゼミでは、日本人には外国語である英語において、音にこだわり続けた人々の思いを追体験し、そのことを通じて言葉そのものに対する理解を深めることを第一の目的とする。

頭ではなく全身で

言語内の3つの構成要素（音、文法、意味）の中で、特に、意味の示す表現力は他を圧倒するものがある。効率を求める現代人には、それゆえ、意味さえ分かればそれでよい。しかし、言葉の発揮する表現力は、実は、もっと多様で、繊細かつダイナミックであり、言葉は単に「意味する」に止まらず、語順や響き、余韻や沈黙にすら拘泥し、曖昧と思われるすべてを包含した総体としてそこに「在る」。言葉は、「事（＝事実）の端（＝瑣末なもの）」などではなく、むしろ、言葉こそが実体であった。「光あれ」と言えば「光が生じた」ように、言葉は現実をそのままに体現する言葉であったのだ。その力を信じている者が詩人と呼ばれる人たちである。それゆえ、その表現を味わうには、頭で意味を理解するだけでなく、全身でその言葉を受け止めなければならない。ともあれ、何度も何度も口にして、舌触りをしっかり確認することが肝要である。さあ、一緒に、音読しよう。

繰り返しの変奏

英詩の表現に特徴的な技法とされるもの一強勢のある音節が強勢のない音節と交互にあらわれることによって生ずるリズム(行line)による区切り(連stanza)形式、脚韻(rhyme)、頭韻(alliteration)、子音韻(consonance)、母音韻(assonance)―さまざまな区分けにおける繰り返しの変奏の織りなす絵模様、音読することによって舌の快楽となつて、直感的に理解される。このゼミでは、直感的理解をいかに論理的に説明するかを通じて、また、論理において説明された内実を感覚的に実感することを通じて、双方への感性が相乗的に、より鋭敏に研ぎ澄まされていくことを目指す。論理に飽き足りないあなた、人に説明できない独自の感覚をどうにかして人に伝えたいあなた、いっしょに詩を味読しながら、言葉そのものに対する感受性を豊かにすることで、身の回りのできごとや人々の思いがさらに濃やかによくわかる人になり、延いては、その感性を生かして独自の学問を打ち立てる!―そんな冒険の第一歩を、ここから踏み出しませんか。

教育学部



教育人間学入門

教育学研究科

矢野 智司 教授 専門分野：教育人間学

絵本に動物が出てくる謎

『ピーターラビットのおはなし』『ぐりとぐら』『ぞうのババール』の絵本をみればわかるように、絵本にはネズミ、ウサギ、クマ、ゾウといった多くの動物たちが登場します。不思議なことには、人間が主人公の絵本よりも動物が主人公の絵本の方が圧倒的に多いのです。なぜこれほど動物が絵本に描かれているのでしょうか。しかも、子どもたちがこのような動物絵本を通して成長することを考えるとき、子どもは動物を必要としているのではないかと考えたいと思います。子どもには、大人のように食料としたり材料としたり使役を使用するようなことは別に、動物を必要とする深い理由があるのではないのでしょうか。この理由とはいったい何か、このゼミでは動物絵本を手がかりにして、この問いから「人間とは何者か」を考えようと思います。

動物と人間の境界線をめぐる哲学

この「人間とは何者か」の問いは、神話に明らかのように、太古より動物との比較によって論議されてきました。動物は人間にとって自分の存在の理由を明らかにする大切な手がかりだったのです。このことが示すように、子どももまた動物絵本を読み、動物と出会うことによって、人間とは何者かを知り、人間と動物との境界線を認識するようになります(動物性を克服し人間になること＝古典的な教育の定義)。しかし、動物はそれ以上の存在です。この人間と動物との境界線は両義的で、動物性は忌避すべきものであると同時に魅力に満ちたものでもあります。動物性がもたらす戦慄や驚異は、日常の世界を超えた驚嘆を生みだします。子どもは野生の存在と出会うことによって、動物との境界線を越境し、動物のように世界との連続的な瞬間を生きていくことができます。そのとき子どもは世界のうちに溶け、比類のない喜びとともに、生命の躍動に十全に触れることができるのです(人間を超えて〈動物〉となること＝新たな人間の可能性)。動物絵本はこの動物との出会い方を伝授します。

人間とは何者か

絵本に動物が登場するのはなぜか?子どもが動物を飼いたがるのはなぜなのか?これらのことは当たり前すぎて学問的な問いの対象にならないと思うかも知れませんが、そうではありません。このような日常の事象のなかに、「人間とは何者か」という最大のミステリーを解くための糸口が隠されているのです。このゼミでは、この人間学的考察を、具体的に絵本を検討しながらすすめていきます。最終日には参加者がお気に入りの絵本を取りあげて、それぞれが考察を加えることになっています。このゼミが終わるときには、絵本と動物そして人間と教育にたいする参加者の見方が変わるだけでなく、人間になること、人間を超えて〈動物〉になることという、人間の生の二重の課題を、自分自身の課題として生きることを学んでもらえればと思います。

文学部



中国の方言と文化

文学研究科

木津 祐子 教授 専門分野：中国近世語学史、最近長崎・琉球の通事研究

授業で目指すこと

今年のポケットゼミは、「中国語の方言と文化」というテーマで開講しています。人間存在の基盤である「ことば」、あまりにも当たり前存在する「ことば」を客体化し、ことばと土地、ことばと文化の密接な関連性を学んでいこうというのが狙いです。思い起こせば、私が中国語研究を志すに到った過程には、様々な場面で印象的な「ことば」との出会いがありました。高校時代に初めて開いた『万葉集』巻頭第一首の不思議な音の響き、大学で知り合った同級生の、母音が軽くてリズムカルな江戸弁、中国語の授業で耳にした舌音や四声の美しさ、これらは全て、ことばへの関心を生み、文学部への進学・そして中文を専攻する上での静かな動機の一つになりました。その後も、初めて滞在した北京で現地の人が話す中国語が全く聞き取れなかったこと、旅行で訪

れた上海が、空気の重さも水の柔らかさも、お茶やお酒や料理の味付け、そしてもちろんことばも北京とは全く異なっていたこと…。いまでも極めて鮮やかな音や色、そして匂いさえも伴って蘇る、異言語そして異文化との出会いが、間違いなく、その時々の私の道標となっていました。

この授業でも、「中国の方言」という切り口を通して、学生の皆さんが自らの言語経験や異文化との出会いについて考え直し、これから遭遇するはずの新たな知的体験を吸収する為の方法論を学んでほしいと願っているところです。

自らの異言語・異文化体験を如何に分析するか

さて、このように企画した授業も、学生さんと実際に出会うことにより、予想を超えた展開を見せつつあります。初回授業で、10人の学生さんたちに自己紹介のカードを書いてもらったところ、なんと、中国の高校から進学した学生さんが4人もいました。教室にいるのは、中国語のことをほとんど知らない一回生ばかりだと思いついていた私は少々驚きました。私の知らないところで、この京都大学も随分国際化していたのです。中国語を母語とする学生さんが半分近くいるクラスとなると、当然のことながら当初の計画に、若干の修正を加えることになりました。もともと中国のみならず日本の方言や地理についても議論をする予定ではありましたが、最初の課題として、日本・中国の境界を取り払い、自らの歴史の中に「言語体験」を発見することを、皆さんに提案しました。出てきたテーマは、「岡山方言の命令三系統について」「関西方言の内部差異」「中国東北方言に及ぼす民族語の影響」「歴史的事件と人口移動・方言」「日中流行語比較」「方言への自覚と共通語への影響」「若者にとっての方言」等々、多様で個人的な経験とプランばかりです。今後は、体験に基づいた各自のテーマを客観的に分析するための方法論と実践を学ぶ段階に入ります。講義で紹介する、中国の方言や文化の多様性と、具体的な学術成果の数々は、方法論を学ぶためのサンプルになってくれるでしょう。大学に入って間もない一回生諸君が、自らの言語体験を、どのようにクラスメートに共有できる形で分析して見せてくれるか、今からその成果が楽しみでなりません。

法学部



政治・行政入門

法学研究科

南 京兎 准教授 専門分野：行政学・公共政策

学而不思則罔、思而不学則殆

学びて思わざればすなわち罔(くら)く、思いて学ばざればすなわち殆(おやう)し。

孔子の論語為政第二の教えは、いかに勉強するか、あるいは、どのように学問に接するのかという学問をする際の要諦です。高校までの勉強は言うまでもなく、大学の教育も教員による詰め込み方式で、学生の暗記力の上手さが頭の良さとしてみなされています。これに対して孔子は、「学ぶだけで、じっくりと自分の頭で思索してみなければ、真に活きた学問とはならない。逆に、自分の頭で思い巡らすだけで、博く学ぶことをしなければ、危なっかしくて頼りにならない」と云います。専門的知識を習得するためには、まず覚えるしかありませんが、覚えた専門知識は外からすでに与えられたものであって、覚えるだけではパブロフの犬のように、ただ反応するだけの頭になります。

これだけでは、学問の発展も期待できません。逆に、考えるだけで、既存の専門知識を習得しなければ、井の中の蛙のように、偏狭な頭になってしまいます。学びながら考え、考えながら学ぶことで、本ゼミは幅広い専門知識を学習しながら、自分の頭で考える能力を身につけることを目的とします。

政治・行政・公共政策の仕組み

私は法学部に所属し、政治学を専門としています。より正確には政治学の中の行政学や公共政策が専攻です。政治と行政の仕組みは次の通りです。「政党」は「選挙制度」を通して国民(有権者)の支持(得票)を集めます。そのうち、「議会」の過半数以上の議席を占める政党は「執政部」を構成します。これが「政権与党」と呼ばれています。この点で議院内閣制は大統領制と大きく異なります。大統領制では、執政長官(大統領)を選抜する選挙と、国会議員選挙が異なり、両方が正統性を保持することになります。執政部は国民の要求をまとめ、議会で法律という形へと変換していきます。議会で成立した法律は「官僚制度」を通して執行されます。他方、道府県や市町村には地方政府がおかれています。また、利益団体やマス・メディアも政治・行政の重要なアクターです。この絡み合いの全体が政治システムと呼ばれ、その中で様々な調整が行われます。政治システムは調整をした後に、「決定」をし、「政策」を打ち出します。この決定や政策が国民の要求に適合していれば、その政治システムは支持されますが、適合していないと、支持されません。これが政治と行政の全体的な仕組みです。

授業の進め方

本ゼミは受講者に上記の政治・行政・政策の中で興味のある対象を探り上げて自由に発表してもらい、それに基づいて全員でディスカッションをしていきます。自由な発表と議論を通して、「学ぶだけ」「思うだけ」ではなく、両者を総合的に統合していきたいと考えています。

経済学部



コーポレートファイナンス入門

経済学研究科

江上 雅彦 教授 専門分野：ファイナンス工学

現在、経営者は「株主重視」という立場から経営を行っています。つまりその企業に投資している株主達の利益が最大になるように行動しなければなりません。

株主はその企業の株式を購入する(=投資する)際に、期待しているリターンを持っています。経営者はこの株主の期待に応えねばならないのです。経営者から見れば、その株主の期待リターンが株式発行して得た資金の「資本コスト」となるわけです。

この考えを基本にして、経営者は資金を効率的に配分して利益を得ることを考えなければなりません。複数のプロジェクトの候補の中からどのプロジェクトを選択すべきかと言い換えてもよいでしょう。「資本コスト」を頭にいれて、そのプロジェクトを評価する必要があります。さらに利益が得られた場合に、どのようにその利益を株主に分配すべきかを考えなければなりません。

このようにコーポレートファイナンスは、「資金の流れ」を通じて、株主の立場から企業活動について考えます。テクニカルな用語を使えば、現在価値(Present Value)、割引キャッシュフロー法(Discounted Cash Flow Method)、リスクプレミアム、CAPM(Capital Asset Pricing Model)、MM理論、最適資本構成などをマスターする必要があります。

こう書くと難しそうですが、もっと素朴に「どのように企業社会が動いているか?」「どの様な仕組みに基づいて企業活動が行われているか?」あるいは「企業の目的は何か?」と問われるかもしれません。そのような問いに体系的に理論的に答えるのが、この「コーポレートファイナンス」です。

医学部



アタマとカラダつながっていますか?

医学研究科

青山 朋樹 准教授 専門分野：整形外科学, リハビリテーション医学
山田 実助教 専門分野：老年医学

アタマとカラダの仕組みはいろいろな学問手法によって明らかにされています。解剖学、生理学、脳科学、神経医学、運動学、心理学など多くの学問へと展開しております。その解析手法は組織学的検討、遺伝子解析、電気生理学的検討、行動分析等々多岐に渡っておりますが、私たちの手法は実践フィールドの中からこの課題に挑んでおります。

1) 二重課題処理能力(dual task)

>はじめに散歩をしながらぼんやりと景色を見つめてみましょう<
>つぎに、その景色の中の一点(看板の小さな文字や花の形など)に注目してみましょう<

さて、いかがでしょうか?その注目した一点はクリアになりましたが、その周辺はぼやけてしまったのではないのでしょうか。何かを注視した際に中心視野がクリアになり、その周辺の周辺視野がぼやけるといった現象で、これらは日常生活においてよく経験する現象です。さらに視野だけではなく周りの音が聞こえにくくなったり、歩きながらの場合には思わず立ち止まってしまう方もおられると思います。私たちのアタマの中には注意配分機能があり、何かに集中する際には他の感覚を閉ざす機能があります。しかし、この注意配分をうまく切り替えて二つ以上の課題を実施する能力を二重課題処理能力(dual task)と呼んでおります。二重課題処理能力には先の例のように認知×認知を同時に行う場合と認知×運動、運動×運動を同時に行う場合があります。認知×認知-能力が高い例は指揮者のように複数の音を同時に聞き分ける、認知×運動-能力が高い例はサッカーのゴールキーパーのように、敵の動きや味方の位置、ボールの位置をモニタしながら、指示を出し、シュートを防ぐなどが挙げられます。逆に、この二重課題処理能力が低下している例はどのようなものがあるのでしょうか。

2) 二重課題処理能力の低下とそれによって引き起こされる事故

これまでの研究で高齢者における二重課題処理能力の低下と転倒や交通事故が関係していることがわかってきました。また高齢者の二重課題処理能力の低下を単なる加齢変化として扱うのは早計で、高齢者であっても二重課題処理能力促進エクササイズを実施することで、その能力が改善することも明らかになってきました。

本ポケゼミでは高齢者の転倒防止を切り口に、フィールドにおいて学生の皆さんと新しい二重課題処理能力強化エクササイズの開発、社会インフラの改善に挑んでおります。

理学部



巨大地震(大地動乱)の時代

理学研究科

平原 和朗 教授 専門分野：固体地球物理学, 地震学

授業のねらい

2011年3月11日にマグニチュード(Mw)9.0の東北地方太平洋沖地震が発生し、未曾有の東日本大震災を引き起こした。2004年スマトラ沖地震(Mw9.1)の例を考えると少なくとも今後10年間は日本列島の地震活動が高まると思われる。それに加えて、今後30年以内にその発生が予測されている、南海トラフ巨大地震は、西南日本に大きな被害(西日本大震災)をもたらすと危惧されている。また、歴史資料は南海トラフ巨大地震発生前50年くらいから発生後20年の間は、西南日本内陸地震の活動が高まることを示している。1995年兵庫県兵庫県地震は直下型地震で大きな都市災害をもたらしたが、この地震から西南日本は内陸地震の活動期に入ったと言われている。また、首都圏直下型地震の発生も危惧されている。このように後世から見ると、今後南海トラフ巨大地震発生に至る間の日本

列島は大地動乱の時代だったと言われる可能性がある。

文系・理系を問わず、これから社会の主役となる君たちが、東北地方太平洋沖超巨大地震の発生から次の南海トラフ巨大地震に至る大地動乱の時代についての鮮明なイメージを持ち、この大地動乱の時代を生き抜くヒントを見つけてくれることを期待する。

授業の進め方

まず、最初に、大地動乱の時代についての簡単な解説を行う。次に、日本地震学会編「地震予知の科学」を、各節を分担して輪講する。この本は、東北地方太平洋沖地震発生前に書かれたものでその時点での地震学の状況を示したものであるが、地震後、地震予知について楽観的に書かれ過ぎているという批判を受けている。輪講では、問題点等について活発な議論を期待する。レポーターには担当節の要点をまとめ、議論をリードする役を期待する。輪講後は、各自設定したテーマについては分野は問わないが、地震に関連したテーマを期待する。最近2年の本講義における学生のテーマを列挙すると、「ダムと地震」「地震と避難所」「応急仮設住宅」「地震災害と経済」「大地震と心理学」「宏観異常現象」「地震と噴火」「巨大地震と津波」「月震」「東日本大震災の経済的影響と復興について」「液状化現象」「地震とエネルギー」「地震災害と人々のこころ」「京都で地震が起きたら」「東海地震予知時の対応」「津波の発生メカニズムについて」「義援金」「建物における地震対策について」「京都と大震災」「地震保険」が挙げられる。

6月ないしは7月の土曜日に、「京都市市民防災センター」を訪れ、地震や風水害についての体験学習を行う。震度7や風速30m/sの実体験、火災避難・消火器操作等といった実体験を通して、自然の脅威と防災・減災について学び・理解することを期待する。

薬学部

薬と医療
Pharmaceuticals and Medicine

薬学研究科

高倉 喜信 教授 専門分野：病態情報薬学
久米 利明 准教授 専門分野：薬品作用解析学
山下 富義 准教授 専門分野：薬品動態制御学
中川 貴之 准教授 専門分野：体機能解析学

薬学は、「くすり」に関する総合科学です。基本となる学問領域は、物理、化学、生物と多岐にわたりますが、これら領域の知識と経験を集結、統合して創られた医薬品が医療現場で使われています。本ポケゼミでは、実際の医療現場で使われるくすりについて、自らがそれを開発する立場から、また自分が患者として使う立場から考えることで薬学という総合科学の一端に触れてほしいと考えています。授業は、SGD(small group discussion)という3~5人の少人数のグループを単位にした演習形式で進めます。教員を交えながら学生同士で意見交換をしながらくすりに関

する理解を深めてもらいます。担当の教員は、薬剤学、薬理学、ゲノム創薬の専門家各専門の立場から、適宜アドバイスはしますが、あくまでも学生が中心となります。自分自身が調べた内容や自分の意見を出し合っ学生同士でコミュニケーションする形でSGDを進めます。授業の最後には、SGDで話し合った内容をまとめてプレゼンテーションしてもらう機会も設けています。以下に、取り上げている話題について紹介します。

(1) 医薬品開発における製剤化の目的とその効果

くすりは使いやすいように、錠剤やカプセル剤など医薬品「製剤」という形に仕上げられています。普段何気なく飲んでいくすりにも実はいろいろと工夫が施されています。薬学部には模擬薬局がありますが、そこで本物のくすりを使って、代表的な製剤の表面や内部を観察して、製剤化の目的や技術について学んでもらいます。意見交換を行い、皆さんが考えた医薬品製剤の有効性、投与方法、製剤化の工夫について発表してもらいます。

(2) 遺伝子治療・細胞療法

現在、普通の医薬品だけではなく、遺伝子や細胞といったこれまでは考えられなかったものをくすりとして利用しようという挑戦的な研究が活発に進められています。従来法では治療が困難であったさまざまな難治性疾患の新しい戦略として期待されています。これら近未来の実現が期待されている治療法の基本的な考え方、方法、事例、問題点についてSGDで討論し、皆さんが考えた成果を発表してもらいます。

コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力は、皆さんがこの後、学部や大学院に進めばもちろんのこと、社会に出てからもとても重要です。このポケゼミは、1回生でこれらの能力を磨くとてもいい機会でもあります。是非、参加してみてください。



生活空間再生学ゼミナール

工学研究科

- 神吉 紀世子 教授** 専門分野：人間生活環境学
- 西山 峰広 教授** 専門分野：建築構法学
- 山岸 常人 教授** 専門分野：建築史学
- 上谷 芳昭 准教授** 専門分野：都市空間工学
- 小椋 大輔 准教授** 専門分野：生活空間環境制御学
- 聲高 裕治 准教授** 専門分野：空間構造開発工学

生活空間の価値と課題を考える

様々な文化遺産を含む多数の建築群からなる生活空間の安全の確保は、地球環境問題が21世紀の課題となり、さらに、巨大地震の発生が想定される状況の中で、現代の重要な緊急の課題となっています。ポケットゼミ「生活空間再生学ゼミナール」は、この問題意識にもとづいて21世紀の重要な社会的資源である建築群の再生と活用について考えることを目的としています。生活空間には、歴史的経過のなかで形成された住まい方の文化

とこれに関して展開する空間性があり、それ自体が価値あるものですが、環境負荷の低減、火災や地震時の安全性、社会構造の変動への応答等、現代において新たに直面している課題に応えつつ、将来にむけてより質の高い生活空間を伝え、創っていく営みが必要とされています。

多角的な視点

ゼミナールは、建築学専攻の計画系・構造系・環境系のそれぞれの系から2名ずつ、計6名の教員が講師となり、多角的な視点から生活空間の再生と活用について議論を行います。講義のほか、京都市内の建築物の見学、簡易な模型の作成と実験、環境測定とその分析等、系や講師の専門性をいかした多様な内容で開催しています。平成25年度は、「町並み調査と保全計画」「文化財建造物の修理の実態、既存木造建築の保存・修復・再生の基礎的考え方」「京都の大空間構造と支えるしくみ」「鉄筋コンクリートでつくる安全で環境にやさしい構造物」「健康で快適な住宅の温熱環境」「地球環境負荷低減のための再生可能エネルギー利用」の6つのテーマをとりあげました。

ゼミナールの風景～西陣にて（平成25年度）～

写真は、京都市内の西陣地区において伝統産業とそれに密接に関わる暮らしの空間を実地に見学した際のもので、建築物の特徴と同時に、伝統的町家の再生と新たな活用の取り組み、地震や火災に備えるための町家の構造補強の取り組みなど、地区で行われている生活空間再生の実際の取り組み例を、関係の方々を直接伺いつつ学び、さらに、町並み調査の作業体験も行いました。

自らの議論を

本ゼミナールを通じて、各自が、京都をはじめ国内外の都市や集落について、それぞれ独特の生活空間の特徴、安全の確保にむけた課題、再生手法のあり方などについて関心を深め、積極的に議論してほしいと考えています。



周北極域の世界: 亜寒帯林・環境・歴史

農学研究科

- 大澤 晃 教授** 専門分野：森林利用学分野

はじめに

ポケットゼミ「周北極域の世界: 亜寒帯林・環境・歴史」では、私が長年研究してきた北半球高緯度地域の森林植生と環境に関する問題の基礎的な部分を含め、先住民の生活・この地域の歴史・地下資源の開発など、関連するいろいろな問題をいっしょに扱ってみることにしました。過度に専門的な議論を行うより、私自身これまで折りに触れて興味を持ってきた他の問題もいっしょに考えてみたいと思ったからです。新たに多くの資料を読みながら、学生のみなさんと一緒に勉強しています。

このポケットゼミでは北極圏とその周辺地域を含む「周北極域」の環境

を概観し、気候の温暖化によって進みつつある植生と環境の変化について考察します。現在この地域に住む人々が歴史的にどのようにこの地に定着し、亜寒帯林やツンドラ植生とどのようなかかわりを持って生活しているかも理解しようとしています。おもに18世紀以来ロシア、フランス、イギリスなどによる周北極地域への進出が進み、先住民の文化や生活に大きな影響を与えてきました。また今日では、石油、天然ガス、オイルサンド、オイルシェールなどの地下資源開発が進み、この地域の人々に影響を与えています。したがって、周北極地域の歴史的事実を踏まえ、またこの地域におこりつつあるさまざまな変化を総合的にとらえて、環境変化とその意味について考えることがこのポケットゼミの目的です。

ポケットゼミの内容

本来なら、周北極域に直接旅行して自然植生や環境を観察し、現地の人たちと話し、これらを行ったうえでいろいろな資料を読み、考える、という方法が理想です。しかし、毎週開講するスタイルの授業には収まりようがありませんし、旅費も高額になってしまいます。そこで、関連した資料をできるだけたくさん読み、足りないところは実際に現地へいったことのある私が説明し、スライドなどを見せ、イメージを膨らませた上で考える、という方法をとることにしました。周北極域に関する書籍で日本語で出版されたものはあまりないので、資料のほとんどは英語の文献を使っています。本来の調査・研究活動により近い学び方をしてもらうため、毎週20～30ページ分の英文を読んでいます。その中で重要だと思った部分を学生が順番で解説し、ディスカッションをします。扱っているテーマは、亜寒帯林植生、氷河期以降の気候と植生変化、地球温暖化と亜寒帯林、先住民の歴史、ロシアのシベリア進出、フランス・イギリスの北米進出と植民地経営、地下資源問題などです。

10 Faculties

京都大学の10の学部についてご紹介します。



学部紹介 Faculties

京都大学の10の学部紹介について

学部の特長、教育カリキュラム、学ぶ事ができる科目などについて述べられています。また、各学部の在学学生や卒業生が自らの学部について語った生の声も収録しています。

みなさんが受験する学部を決める際の指針としてください。

- | | | | | | |
|----|--|--|----|--|--|
| 22 | | 総合人間学部
Faculty of Integrated Human Studies | 42 | | 理学部
Faculty of Science |
| 26 | | 文学部
Faculty of Letters | 46 | | 医学部
Faculty of Medicine |
| 30 | | 教育学部
Faculty of Education | 54 | | 薬学部
Faculty of Pharmaceutical Sciences |
| 34 | | 法学部
Faculty of Law | 58 | | 工学部
Faculty of Engineering |
| 38 | | 経済学部
Faculty of Economics | 62 | | 農学部
Faculty of Agriculture |